きのうきょう

熊本行きの汽車に乗った。ふと前を見た。白髪のひとが大きい荷物を網棚にのせている。あっ、県下で一番有名な実業家のKさんだ。秘書は何をしているのか。いない。おひとりなのだ。ホームに見送りさえもいない。

座席越しの背筋をすっと伸ばしている後ろ姿は、一切のむだ、虚飾（きょしょく）を拒否している。私はいいしれない感動をおぼえる。

いま暗い時代。私の周辺に、倒産もできず夜逃げしたのも一、二人にとどまらない。ガラス越しにみた玄関には女の子のズック靴がそのままだった。圧倒的多数でその座についた首長たちも、今こそ、心に喪服を着けて、謙虚に責任を果たしてほしい。——きのうの願い。

別府の児童施設平和園に新園長新田目（あらため）さんをお訪ねする。私の問いにこう答えられた。「教護院に勤めたこともあるから、ここの子供がみんな良い子に見えて仕方がないんです」。にこにこ顔が、じつにその言葉にふさわしい。

子供はよい点を見つけてやれば、まちがいなく育つ。話は、ある少年のことになる。少年のある年の修学旅行の宿は京都。男女生徒は階の上下に分けられていたが、彼は何かのことで階段の途中で女の子に話しかけていた。通りかかった教師が、いきなり女生徒の顔を力いっぱいたたき、「色けづきやがって！」とののしった。ぶたれるなら少年の方なのに。いいわけを言うスキもなかった。

後で何かのはずみで事情を知った少年の母が、その子の母に謝りたいからと、名を聞いても、少年はついに名を明かさなかった。言わないことが、少年にとってはせめてもの償いと信じられていたのだろう。

教育とは子の発達を助けること。色気づくことこそまさに、重要な発達の印ではないか。そのことに無知な教師は、もう教師ではない。—きょうの思い。

（一九八七年四月二十五日）